

情報モラルの指導実践報告

～高等部普通科の自立活動～

田中 優子・芳之内 修・石黒 裕也

本稿では、2021年度の1学期前半に本校高等部普通科1年で行った「情報モラル」の自立活動について報告する。ICT化が進む情報社会を生きる上で、情報機器についての正しい知識と理解が国民全体に求められているが、特にコロナ禍にある現在は、様々なコミュニケーション上の制約の中、学校生活においても携帯電話やタブレット端末などの情報機器をコミュニケーションツールとして使用する機会は以前よりも増えている。コロナ禍で例年よりも行動が制限され、楽しみも少ない中、校内での使用を認められ、タブレット端末のようにフィルタリングもない携帯電話は数少ない娯楽のツールになり得る。しかし、正しい知識なしに情報機器を使うことは大変な危険と隣り合わせの行為である。本校高等部普通科では、校内での携帯電話の使用を禁じない代わりに、卒業後も情報社会で問題なく生きていけるように、生徒たちには正しい知識と理解を持って、携帯電話の節度ある使用ができるように指導している。本稿で報告するのは、その第1回目の指導の内容である。聾学校としては人数が多い本校の特色を活かして、生徒のグループ活動という形で情報モラルに関するテーマについて調べ、発表する。「情報モラル」教育は、自立活動の「人間関係の形成」とも関わることなので、第1回目の自立活動のテーマを「情報モラル」とし、学年全体で同じテーマについて話し合い、個人面談を通じて個々の実態把握と指導に取り組んだ。

キー・ワード：情報モラル 自立活動 人間関係の形成 携帯電話 タブレット端末

1 はじめに

文科省は「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」を「情報モラル」と定めており、「他者への影響を考え、人権、知的財産権など自他の権利を尊重し情報社会での行動に責任をもつことや、危険回避など情報を正しく安全に利用できること、コンピュータなどの情報機器の使用による健康とのかかわりを理解することなど」を各教科の指導の中で身に付けさせることとしている(文科省2020)。本校は特別支援学校であり、各教科における指導の外にも自立活動の時間を情報モラル教育に有効に活用している。特に毎年必ず問題となるのは携帯電話とタブレット端末の使い方である。既に10年以上前の文科省(2010)でも、「携帯電話の所有や利用については家庭の問題と認識されがちだが、(中略)教科指導におけるICT活用は今後の生徒指導には必要不可欠である。携帯電話やコンピュータを利

用した教育の進展のためにも、学校全体で情報モラル教育を取り入れることが必要である」という見解が示されているが、昨年度からはコロナ禍にあって、学校でも授業や行事をリモートで行う機会が増えた。生徒達がICT機器を使うことが以前よりも増え、正しい情報モラル教育の必要性も増している。

本稿では、2021年4月に本校高等部普通科に入学してきた1年生24人を対象に、自立活動の時間に行った最初の情報モラル教育の実践について報告する。

2 生徒の実態

(1) 中学部までとの違い

聴覚特別支援学校である本校の生徒たちにとっては日常のコミュニケーションツールとして携帯電話のメール機能は必需品であり、寄宿舎生は保護者とのやり取りにも携帯電話が必要である。高校生

ともなれば、携帯電話もルールを守って使えるようにしなければならないという考えの下に、高等部普通科では携帯電話を校内で使うことを認めている。

本校中学部もそうであるが、聾学校でも、中学部までは学校内での携帯電話の使用を禁じているところは多い。そのため、高等部に上がって携帯電話が校内でも使えるようになり、また、授業のためのツールとしてではあるが、タブレット端末が配布されると、生徒たちの気分は高揚し、つい、ルールから外れた使い方をしてしまう生徒も出てくる。ゆえに1年生は1学期開始早々に第1回目の情報モラルの指導を行い、正しい知識と良識を身につけさせることが必要である。

(2) 実態把握の流れ

新学期が始まり、内部生12名、外部生12名、計24名の1学年の学校生活が始まった。コロナ禍にあって、例年のような形での新入生歓迎会は行えず、密を避けた形でリモートも取り入れながら生徒会が中心となって新入生を迎えてくれたが、やはり窮屈さはあり、学年担任としては、新入生たちがどのように友人関係を作っていくのか、気になるところではあった。そこで、1学期の間に生徒との個人面談を2回行った。1回目は4月末から5月初めにかけてであったが、そこで生徒たちの携帯電話の使用に問題があることがわかってきた。生徒間で写真を撮り合い、その写真を共有することが一部の生徒の間で盛んに行われており、場合によっては撮られる生徒の了解を得ていないこともあった。特に公立の聾学校出身の生徒だと、同学年の生徒が数人しかいないという環境に置かれることもあり、本校に入学して急にたくさんの友人ができ、楽しくて、自分がどんな楽しい環境にいるのかを知人に知らせたいという気持ちが生じるというケースも見られた。面談でそのような状況が把握できたため、個別に指導するとともに、学年全体でも情報モラルについて考えさせる時間を設けた。自立活動は個々の生徒の実態に応じて個別に行うものだが、本校は1学年が24人と、特別支援学校としては人数も多く、生徒同士

がコミュニケーションを取りながら高め合っていけるような指導方法も有効である。特に、グループ活動は自他を比較する中で気づきも多いため、学年活動の中では積極的に取り入れている。今回も個々の学びとグループ活動を組み合わせて活動を進めさせることにした。

3 自立活動の目標と計画

(1) 自立活動の目標

長期的な目標としては、「情報社会における正しい判断や望ましい態度を育てること」と「情報社会で安全に生活するための危険回避の方法の理解やセキュリティの知識・技術、健康への意識を育てること」を掲げているが。短期的な指導目標は「携帯電話やタブレット端末などのICT機器を正しい知識を持って適切に使えるようになる」ことである。中学部から高等部に進学して、環境が大きく変わった時点で、まずは押さえておかなければならないことである。自立活動の内容としては、新学習指導要領(文部科学省2020)に示されている6つの区分のうち、「3. 人間関係の形成」に関わることとして扱う。特にICT機器を通して他者と関り、集団へ参加することは、今後様々な場面で求められることである。そのためのステップとして、高等部第1学年最初の自立活動を行った。

(2) 活動計画

第1回「情報モラル」教育の計画はTable1に示した通りである。グループは4人ずつのグループを6つ作らせた。グループ活動で調べるテーマは下記の3つで、同じテーマについて2つのグループが調べることとし、どのテーマを調べるかは生徒たちに話し合っ決めてさせた。

テーマ1：コンピューターウイルス、情報漏洩

テーマ2：SNS上の誹謗中傷・捏造

テーマ3：著作権の問題

Table 1

1 限目	教員の講義。「情報モラルについて」 プリント配布→「情報モラル」とは何か。 各自調べ学習
2 限目	グループ活動。「情報モラル」について 調べたことを話し合っまとめ、提出す る。→教員が確認して返却
3 限目	グループ活動。担当テーマについて調 べ、発表資料を作る。
4 限目	発表。テーマ1の2グループ
5 限目	発表。テーマ2の2グループ
6 限目	発表。テーマ3の2グループ まとめを書いて提出

自立活動としての本来の目標の他にも、この活動には主となる活動の副産物的なものとして、次に挙げるねらいがあった。

- a. クラスや学年の連帯感を高める。
- b. 発表資料の作り方、発表の仕方の基本を学ぶ。

コロナ禍にあって、生徒達は多くの制約の中で学校生活を送っている。本来なら楽しく話しながら過ごせる昼休みも、食事中は前を向いて黙って食べなければならない。レクリエーションの類も工夫してできる範囲で行っているが、以前に比べて生徒間が触れ合い、親しみ合う機会は少なくなっている。1年生は入学してきて1か月経っておらず、まだ学年で共同作業をする機会を十分に持てずにいた。そんな中で、同じテーマについて共に調べ、意見交換をし、発表するという活動は密を避けながらもでき、生徒間の距離を縮める機会になる。そんな期待もあった。

発表資料の作り方や発表の仕方は、高校3年間の間に国語の授業や総合的な探究の時間に生徒に指導する機会はあるが、その前にごく基本的なことがわかっているか学年担当として確認しておきたかった。もう10年近く前になるが、筆者は本校で勤務する以前はいくつかの大学で講義を受け持っていたことがある。各講義で最初に課した大学1年生のレポートは文体が普通体でなかったり、ら抜き言葉や話し言葉が使われていたり、参考文献が載せられていな

かったり等々、ごく基本的なことができておらず、大学でそこから指導しなければならないこともあった。また、大学の講義時間をそういった基本事項の指導に使うのはもったいない。レポートの書き方や発表資料の作り方の基本的なことは高校の間に教えておきたい。また、聴覚障害のある生徒は聞こえる生徒に比べて口頭での説明が伝わりにくいので、その分、発表資料をわかりやすく作る必要がある。そのための第一歩としてこの機会を利用し、まずは学年全体への指導を行いたいと考えた。本校は習熟度別クラスで授業を行っているため、各教科での指導だと、学年間での統一が取りにくいいため、この機会に学年全体で共通認識を持たせたかった。

4 具体的な指導の内容

(1) 調べ学習と発表

生徒たちにはまず次の2つの課題を与えた。

課題1:

「情報モラル」とは何か。その定義を調べなさい。
各自で調べた後、グループでまとめて代表者がロイロノート・スクールの提出箱に提出してください。

課題2:

グループに分かれて、与えられたテーマについて分担して調べ、発表しましょう。同じ1つのテーマを2グループが担当し、発表内容を比較します。発表資料はロイロノート・スクールを使って作りましょう。発表資料も代表がロイロノート・スクールの提出箱に提出してください。

調べるツールは生徒たちが持っているタブレット端末で、その時間はインターネット接続ができるようにした。また、調べたことをまとめて提出するためのツールとしては、各教科でも使っているロイロノート・スクールというアプリを使用した。教員から生徒への指示や講評もこのアプリを使って送信した。提出物は全員で共有されるように設定したので、生徒全員が他のグループの提出物を自由に見られる。なお、このアプリでは提出物は端末上で「カード」の形でやり取りする。

課題1が提出された時点で、各グループの提出物について教員が講評をまとめ、生徒全員に送信した(Fig.1参照)。特によくできていた1-Bグループの良かった点を具体的に挙げ、その上で他のグループのモチベーションを下げないように、他のグループの良かった点もできるだけ挙げた。試験がない自立活動だからこそ、個々の生徒への評価は細かく行いたい。それが生徒の学びへのモチベーションにもつながる。ここで基本的なことができていなかったグループは1-Bグループや他のグループの提出物と比べることで自分たちに足りなかったものに気づくことを期待した。

教員講評

課題1 情報モラルについて

1-Bグループ、いいですね。

■良かった点

- ・最初に課題名、グループ名、メンバー名をきちんと明記している。
- ・情報モラルの定義を述べただけではなく、その定義で使われている言葉の意味や考え方も調べて補足している。
- ・わかりやすい図を探して(引用先も明記して)添えている。
- ・情報モラルに反した事例を挙げている。
- ・その上で注意すべきことを挙げている。

他にも

3-Aは定義と事例を要領よくまとめている。

2-Bは事例はないが、要点を適切にまとめている。2-Aも同様だが、赤のカードは必要ないのでは。次のカードと内容が重複している。

3-Bは事例も調べている。手書きのメモ感が出ているのが少し残念。

1-Aはこれでいいのかな？他のグループと比べてみよう。

Fig. 1 教員講評

webから情報を得て資料を作る場合、ありがたいのは、web上の記述をそのまま切り貼りして、分か

った気になってしまうことである。1-Bは引用した記述の中で気になる言葉の意味を調べ、それがどういふことなのか、もう少しかみ砕いて説明しているサイトを探して、説明を補足していた。1-Bの提出物の一部を次に示す(Fig.2)。

情報モラル

情報モラルとは情報社会を生きぬくために全国民が身につけておくべき態度や考え方、倫理。

特にインターネットの利用によって自らを危険に晒したり、他者を害したりしないようにするための考え方。

倫理(りんり) → 人間世界の秩序

秩序(ちつじょ) → 物事の正しい道筋

この「態度や考え方」はどうあるべきか考えると2つの方向性がある。

1つ目は、情報を評価して取捨選択できる思考力や責任感を自覚し、日々変化する環境に適応するよう学習し続けることを身につけること。

2つ目は、人に迷惑をかけず、余計なことをせず、注意されたことをやらず、自分の中に生まれる悪い心や欲求を抑える自制心を働かせること。

光村図書出版

Fig. 2 1-Bの提出物の一部

1-Bの提出物も、まだ細かい引用先が明記していないなど、指摘すべきところはあったが、他のグループと比べると完成度が高く、基本的なことに気を付けて、時間をかけて提出物を作っていることがうかがえた。一方、課題1については、web上で見つけた定義を貼り付けただけで、カード1枚で終わっ

てしまっているグループもいた。

Fig. 1 の講評を次の時間に対面でも行い、1-B の提出物を良い例として示しながら、提出物を作る際に必要なことを確認した。講評を課題 1 と課題 2 の間に挟んだ効果があったようで、課題 2 の発表資料作りでは、各グループの提出物は課題 1 よりもレベルアップしていた。また、他のグループとの差別化を図り、各グループで工夫が見られた。同じテーマを 2 グループずつに担当させたのもそうした傾向に拍車をかけたと考えられる。例えば、2-B グループは著作権について調べたが、最初に辞書から一般的な定義を引用した後、説明が長く専門的でわかりにくいということで、自分たちで大まかにまとめ直したものを Fig. 3 のように示した。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 著作権とは... 自分が作ったものを勝手に真似させないための権利 ・ 侵害すると... 損害賠償しなければならない! |
|---|

Fig. 3 2-B の発表資料の一部

さらに、人気の漫画を友達に紹介しようとした高校生がインターネットにその漫画をスキャンしたものをそのまま載せてしまい、それが次々に拡散して、ついには出版社から賠償金を請求されてしまったという架空のストーリーを作成してわかりやすく説明した上で、実際に無料漫画サイトの経営者が逮捕されたことについての記事を紹介するなど、随所に工夫が見られた。各発表の後には、各グループに 5 分程度時間を与え、質問や意見を言わせた。その場で答えられない質問に関しては、そのグループが責任を持って調べて、後からロイロノート・スクールに追加発表することとした。

(2) 生徒の感想

発表後に、教員が講評を行い、仕上げとして生徒に次の 3 つについてワークシートに書いて提出させた。

- ・ 今回の活動で学んだこと
- ・ そこから考えたこと
- ・ 今回の学びをどう活かしていくか

生徒の感想から 2 つを次に挙げる。

【生徒 A の感想】

便利なツールを使う時は、常に気を付けなければならないと思った。例えば何気ない一言が傷をつけてしまったりする。また、著作権にも気を付けなければならない。だから、メッセージを送る前に相手の気持ちを考えてから送ろうと思う。そして、著作権はいろいろと細かいことがわかったので、引用元を貼ったり、使ってもいいものか確認してから使おうと思う。

【生徒 B の感想】

思っている以上にトラブルは身近なところにあると感じた。もしかしたら、自分も知らず知らずのうちに何かしているかもしれないと怖くなった。インターネットに一度載せたら、それらを完全に消すのは厳しい。だからこそ、気を付けなければならない。今後もこういう学習はしっかりしていきたい。大人になったら、自分で考えて行動するようになる必要がある。

これらの感想を見る限りでは、他者への影響や自他の権利、危険回避といったことへの意識は確実に芽生え、あるいは高まったと考えられる。

5 おわりに

今回の自立活動を調べ学習と発表の形で行ったことで、生徒たちが他のグループの生徒にもわかるように「どう説明するか」考え、その過程で自分たちの理解も深まったと考えられる。また、発表の仕方や資料の作り方についても学年として情報を共有でき、意見交換を通して学年間の距離も縮まった。

発表が済んでからも、昼休みを中心に生徒の学年担当教員が生徒の様子に注意し、また、2 回目の面談でも携帯電話の使い方などについて確認したところ、1 学期当初と比べて生徒の意識が変わっていることは確認できた。情報モラル教育の第一段階としての短期目標は達成できたかと思われるが、「のど元

過ぎれば熱さを忘れる」という諺もあり、一度だけで終われば生徒の記憶も薄れていく。また、目的や場面が変わると学んだこととつなげて考えられない生徒がいるのも事実である。そのため、情報モラル教育は自立活動や普段の教科指導の中で、繰り返し継続して行っていくつもりである。

〔付記〕

本研究は筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

社団法人日本教育工学振興会(2009)

すべての先生のための「情報モラル」指導実践キックオフガイド

http://jnk4.info/www/moral-guidebook-2007/kickoff/pdf/moralguide_all.pdf

文部科学省(2010)

教育の情報化に関する手引 検討案 第5章「情報モラル教育」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/056/shiryo/attach/1249674.htm

文部科学省(2020)

高等部学習指導要領（平成31年2月告示）。